



Title	都市の公共空間に発生する「一時的自律ゾーン」 : ローマのBaobab Experienceの活動から考える
Author(s)	井本, 恭子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2020, 54, p. 65-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

都市の公共空間に発生する「一時的自律ゾーン」

—ローマの *Baobab Experience* の活動から考える—

井 本 恭 子

キーワード：「難民」／強制退去／一時的自律ゾーン

はじめに

新型コロナウイルス感染症による緊急事態の第一フェーズの間は、私たちは忘れられ、無視されていました。感染の危険にさらされ、保護もなく路上に放置されたままでした。都市封鎖が解除された現在、私たちは再び煩わしい存在になります。みんなが人気のない都市で家に閉じこもっている間は、私たちは見えない存在ですが、世の中に再び人が出てきて外に目を向けるようになると、私たちは消えなければいけないのです。また見苦しいと見なされるからです。（訳・傍点は筆者による）

2020年3月25日、イタリアの全国紙「ラ・レプブリカ」ローマ版は、都市封鎖解除後、警察によるテルミネ駅およびティブルティーナ駅周辺の「野宿者」の一掃を報じた。冒頭の言葉は、この容赦のない強制立退に対して、ティブルティーナ駅東側の空地で「難民」支援を続けている *Baobab Experience* の市民ボランティアから発せられたものである。筆者は人間が“*indecorosi*”「見苦しい」と形容されることに驚いた。ローマの新たな条例が“*sicurezza*”「安全」「*decoro*」「美観」「*legalità*」「合法性」を徹底させることを謳っているため、皮肉を込めて“*indecorosi*”を使っているとしても、このような都市空間の政治性や統治性は不気味である。公共空間の“*sicurezza*”

“decoro” “legalità” に反すると判断されたモノや人間は、問答無用に取り除かれたり、締め出されたりしてもよい存在になってしまうからである。

今回の強制退去についても、アフリカから地中海経由で「庇護」を求めて、ヨーロッパに越境してくる人たちの空間的な移動と拡散を制御し管理しようとする EU の意図と現実の展開のズレ、「門番」に指定されたイタリアの「難民」受け入れシステムの機能不全、国境閉鎖を始める国々といった外部条件はすべて捨象されてしまい、「不法占拠」の問題に単純化される。いずれにしろ、排除されていい「人間」はいないはずだが、市民は自分たちの居住区の広場、公園、通りなどの住環境や生活環境の「劣化」の根源として、「改善」の阻害要因として一面的に、静態的に捉えてしまう。

そこで、本稿では、外部条件に左右される不安定な状態でも、ローマの都市空間や市民との関係を利用しながら、移動を続けて生き抜いている人たちの動きに照準を合わせることにする。その目的は、市民ボランティア・グループ *Baobab Experience* を介して、強制退去の対象になった人たち／常に越境者であり続ける人たちが、都市内部に「一時的自律ゾーン」をつくること、多様な関係によって周囲と分断されずに連帯していることを明らかにすることである。また、*Baobab Experience* の活動が、一時的な避難先あるいは移住先の社会の都合のいいように生きる「難民」を「設計」したり、現実とのつじつま合わせをしたりするような支援のしかたをしないからこそ、このような「自律」と「連帯」が可能になることも示したい。

1. Centro Baobab : クーバ通り5番

Baobab Experience は事務所を構えた「難民」支援組織ではない。市民のボランティア・グループのネットワークである。現在はティブルティーナ駅東側の広い空地を利用して、ローマを中継点あるいは滞在先にしている「難民」に、温かい食事と寝る場所（テント）を提供している。必要に応じて、生活物資（衣料や食料など）、情報の提供や医療、法律の相談も行なってい

る。医師や弁護士も参加しているので、こうした包括的な支援が可能なのである。「国境ではなく、人を守る」を掲げ、きめ細やかな支援活動を続けていることが口コミで広まり、今では「アフリカの角」方面から長い移動を続けてきた人たちの「拠り所」となっている。しかし、*Baobab Experience* もまた強制退去に遭いながら、中継点としての活動を維持するために、彼らとともに現在の場所に移動してきたのである。

ここでは、その軌跡を活動記録¹⁾を頼りに辿ってみよう。都市行政の態度変更に、場所を移動するという状況に即応した活動形態の柔軟な手法の一端が見えてくるはずである。

Baobab Experience は、2004 年からクーパ通りにあった廃工場を利用して、多くの「移民」を支援してきた市民ボランティア・グループ *Centro Baobab* が、名前と場所を変えて新たにスタートさせたものである。当初はこうした市民ボランティアの活動に都市行政も場所を提供して協力していた。ところが、2015 年、エリトリア、エチオピア、南スーダンから多くの人たちが、親類縁者が暮す北ヨーロッパの国々（とくにスウェーデン）を目指して、地中海を渡ってくるようになると、そうしたルートの中継拠点となる *Baobab* への行政サイドの対応が一変する。同年 5 月 11 日のポンテ・マンモロ地区（同じ *Municipio IV* の管轄）にある「歴史的な」バラックの強制撤去をはじめとした「不法占拠」の場所の一掃が次々と始まり、クーパ通りの廃工場を受け入れ施設として利用していた *Baobab* に対しても、退去勧告が突きつけられたのである²⁾。理由は「衛生上の問題」である。*Baobab* は合法的に活動しており、そこに滞在する人たちも、玄関口のランペドゥーザ島で「選別」された庇護対象者であるから、それ以外の理由づけはできないからだと推察される。

Baobab は粘り強く交渉し、最後まで抵抗したものの、2015 年 12 月に強制退去となり、廃工場を空け渡して路上に出ることになった。「施設」ではなく、「路上」が活動の拠点となったのである。2016 年 5 月、*Baobab Experience* と名を改め、クーパ通りはテントが並ぶと幅が 1.5 メートルしか

ないが、市民ボランティアは活動を再開した。その間にヨーロッパの情勢は変化していた。シェンゲン圏内で国境管理の再導入を決定した国の影響で、イタリアからフランスやオーストリアへの移動は事実上不可能になったのである³⁾。そうすると、イタリアの都市はもはや通過点ではなく、移動できない「難民」たちの滞留あるいは還流先になる。事実、クーパ通りにはそうした人たちのテントも加わり、ますます密集した空間になっていった。それでも、*Baobab Experience* の市民ボランティアはさまざまなネットワークや近隣の商店やレストランなどの協力のおかげで、温かい食事（台所がないので家で用意する）を用意し、必要な生活物資を調達し、シャワーはないが当面はなんとか路上で暮らすことができるように協力した。また「難民」たちの足止めの時間を埋めるかのように、レクリエーションの企画（サッカーの試合、ローマ観光、海水浴など）や語学学習など、思いつくままに実践していった。もちろん、クーパ通りをねぐらにしていない人たちにも、食事や生活物資などを提供しており、誰にでも開かれていた空間となっていた。

ところが、強制退去は何度でも行われ、警察とのイタチごっこが始まったのである。2016年6月に続いて9月30日、クーパ通りのテントは撤去され、「難民」は路上からも締め出されることになった。通りを塞いでいるという近隣住民からの苦情が理由のようである。何人かは運よく赤十字の施設に宿泊することができたが、大部分は周辺地区の空地（元は駐車場だったところ）に散らばるしかなかった。*Baobab Experience* のボランティアたちは、他のアソシエーションと交渉して、毎晩路上生活者に食べ物を運んでいる場所で、「締め出された」人たちも食事が取れるようにするだけで精一杯であった。

難民を「受け入れる」制度的な手法が引き起こす矛盾を装甲車やブルドーザーを出動させて解決しようとする（見えなくする）政府やコムーネの強硬な態度を批判しつつ、*Baobab Experience* は別の場所へと移動した。正確には、「締め出された」人たちが集まってくる場所が、*Baobab Experience* の活動の「拠点」となっていったと言ったほうがいだろう。

2. *Baobab Experience* : スパドリニー広場、マスラックス広場

強制退去でクーパ通りから姿を消した（見えなくなった）人たちは、どこへ行ったのだろうか。Schmidt と Palutan の共同調査⁴⁾によれば、しばらくは、路上生活者のテリトリーに身を寄せていたようだが、少人数のグループになって、自発的にティブルティーナ駅へと移動し、スパドリニー広場に集まり始めた。そして *Baobab Experience* の市民ボランティアの助けを借りながら、自分たちの「拠り所」として利用するようになっていった。そこは駐車場用地であるが、バスの停留所（一日に数本しかない）があるだけで、駅の改築が完了した 2011 年からずっと空いている場所だった。ようやく落ち着いたかに見えたのもつかの間、2017 年 4 月 27 日に装甲車がやってきてテントを除去、私物はすべて没収、「難民」たちはバスに乗せられ、警察に運ばれていった。*Baobab Experience* のホームページにある「記録」（強制退去をくぐり抜けて残ったもの）を見ると、今度は BNL-Paribas グループの銀行が近くにオフィスを開くという理由のようである。

さらに「記録」を見ていくと、警察で保護対象者であることが確認されると、再びスパドリニー広場に戻されることがわかる。そして市民ボランティアとともに「難民」たちは再びテント（ほとんどが市民からの寄付）を張り始める。すると 6 月 19 日にまた警察本部、都市警察、大型廃品回収業者が「大掃除」にやってくる。それでも、*Baobab Experience* はティブルティーナ駅裏の空地から動かず、マスラックス広場と命名して⁵⁾、幾重にも締め出されている「難民」たちがようやく見つけた「隙間」を守り続けている。

では、強制撤去以外のマスラックス広場の日常はどのようなものなのだろうか。Schmidt と Palutan の現地調査は、日常の風景を詳細に描写し、ボランティアの声も「難民」の声も丁寧に拾いあげているので、それをもとにいくつか興味深い点をまとめてみる。⁶⁾

- ①外から見た必要性ではなく、内的な要求を中心に活動している。

例えば、必要なものはHPやFacebook使って発信しているので、欲しいものを市民が運んでくれる。「難民」は自分の必要な生活物資から法律相・医療相談まで、さまざまな要望を出している。広場内には「市」は立たない。

- ②強力な横のつながりを駆使して、さまざまな状況に対応している。

できるだけ温かい食事のメニューを可能にするために、商店やカトリック系の支援組織を巻き込んでいる。医療面では、Medu（人権のための医療団）に協力してもらっている。

- ③毎日ボランティアの誰かが必ず顔を見せ、名前を呼んでいる。

「難民」たちを見守る誰かが必ずいる。イヤフォンで音楽を聴く者、おしゃべりする者、仲間とサッカーをする者、寝転がる者など、ボランティアが頻繁に出入りする場所で、めいめいがくつろぐ様子が見られる。

- ④協働する。

当初は無償の行為だとはなかなか信じてもらえず、一般的な支援する／支援される、保護／被保護の固定された役割関係を崩すのに時間がかかった。しばらくして広場の様子がわかると、だんだん近隣住区の住人どうしのように振るまい始める。一緒にテントを組み立てたり、広場の片付けをしたり、食事を分け合ったりする。

このようにマスラックス広場の日常は、強力な「個性」や「個人性」、そして連帯に満ちている。「難民」や「ボランティア」というまとまった集団を代表する者は一人もいない。とりわけ、施設の規模が大きくなると「難民」は社会の緊急性や必要性といった外からの要求を突きつけられるばかりで、固有の時間と空間を生きる多様な存在であることが忘れられてしまう。

「難民」を一律に扱わず、柔軟な対応をしている *Baobab Experience* は、意図的かどうかは別として、それぞれの「個性」の回復と「支援」を同時にやっていると言えるのではないだろうか。

3. 「一時的自律ゾーン」

Baobab Experience の活動拠点はクーパ通りの廃工場だったが、強制退去させられて、「難民」たちのあとを追うようにティブルティーナ駅裏の「空地」（マスラックス広場）へと移動したことはすでに述べた。また、ローマの内部で広場や路上、駅周辺などのオープンスペースがかなりの「難民」の「寝床」になっていること、廃屋や廃工場などが「難民」の「占有」状態であることの解決策が、強制退去であることも指摘しておいた。ここでそれを再び確認するのは、表面的には同じように見える強制退去が、根本的な違いを含んでいるからである。それは何か。*Baobab Experience* と共にいることによって「難民」は周辺地区から切り離されない、簡単には孤立させられないことにある。他の場所

にいる「難民」は支援されていないという意味ではなく、*Baobab Experience* のように「難民」のテントがある場所が、そのまま「拠点」となっているかどうかが重要なのである。

クーパ通りにいた頃から数えれば、強制退去はおそらく 30 回を超えるだろう。廃工場はまさに避難先の“casa”「家」、建物だったの

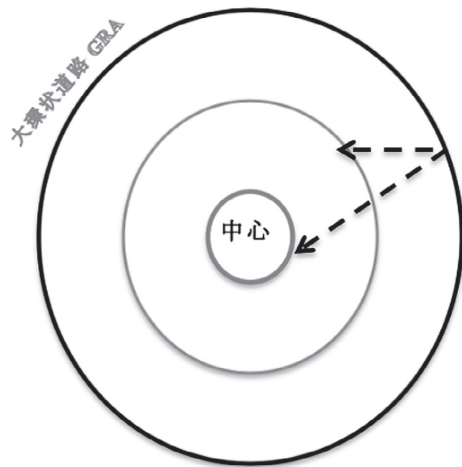


図1 ローマの同心円構造：「占有」場所の移動

で、その空間から追い出されたことになる。しかし、マスラック広場はオープンスペースである。この違いは大いきのではないだろうか。つまり、固定された「家」から移動性の高い「テント」への変化は、もっと決定的な何かを示していると考えられる。

結論を先取りすれば、空間から時間への転換である。クーパ通りの廃工場は取り壊されることもなく、再活用されてもいないので、強制退去は嫌がらせとしか思えないが、とにかく、そこからの追放は、別の空間への移動になる。しかし、マスラックス広場は違う。強制退去の循環が起きている(図2)。

この繰り返し(循環)はもはや空間移動ではなく、時間へ移行している。これはどういうことなのか。

マスラックス広場は、*Baobab Experience* がランドマークとなっている「難民」たちの相対的な「小さな自治空間」と言っても間違いではないだろう。そこは「難民」支援サービスの場所であると同時に、「難民」たちがさまざまな人とのかかわりあいのなかで、自らの「個性」を取り戻す場所、確認する

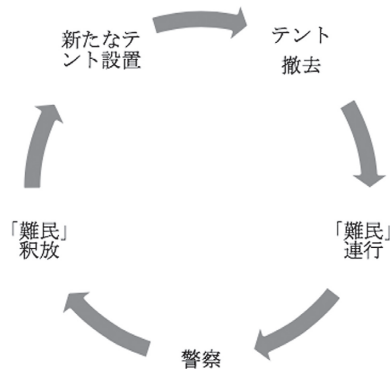


図2 強制退去の循環

場所でもあった。その具体像については、第2章で言及しておいた。強制退去は「小さな自治空間」の消滅を意味する。クーパ通りの廃工場からの移動は、まさに空間的な喪失を伴うものであった。それ以前に、「難民」たちはすでに地理的な逃避場所さえもない。このような地理的・空間的な喪失の後、マスラックス広場からの強制退去が生じている。

ティブルティーナ駅裏のスペースは、*Baobab Experience* が「難民」たちとともに「小さな自治空間」に転換したものの、もはや消滅の繰り返しのなかで維持されるしかない。だとすれば、それは「一時的」でしかあり得な

いだろう。これが空間から時間への移行を示すものだとは筆者は考える。このような「一時的な小さな自治空間」は、ハキム・ベイの言葉を借りれば、“Temporary Autonomous Zone”「一時的自律ゾーン」⁷⁾となるだろう。パラックや放置された建物を「占拠」という行動についても、空間から時間への転換という視座で捉えなおすことができるのではないだろうか。

むすびにかえて

冒頭に引用した *Baobab Experience* の市民ボランティアの言葉は、治安や秩序、衛生や美観を理由に、「難民」たちを再び「不可視化」（認識しない）する都市行政、国に対する痛烈な批判である。これを難民の受け入れや支援政策の問題に押し込めてしまうと、「不法占拠」をなくすような制度的な改善策のみが議論されることになる。あるいは人間か市民かをめぐる権利の問題にぶつかってしまう。そもそも市民も人間なのに、権利宣言は別とは奇妙である。

本稿は、難民政策や制度上の問題ではなく、強制退去という手法によって、都市の公共空間から「締め出される難民」の存在そのものについて、ともに移動する *Baobab Experience* の活動から考えてみたものである。その結果、「締め出された」存在こそが、「一時的自律ゾーン」の発生を示していることを明らかにした。

都市の広場、公園、路上の隙間にある「一時的自律ゾーン」さえも認めない国や都市の強硬な態度、それを批判するどころか、大いに歓迎して後押しする市民の存在に目を向けると、公共空間の統治性の問題にかかわっているゆえにより深刻である。「難民」の受け入れや支援についても、このような「一時的自律ゾーン」から問い直す必要があるのではないだろうか。

[注]

- 1) *Baobab Experience* のホームページを参照。設立の趣旨や経緯、活動形態や種類、さまざまなトピックの記事などが掲載されている。また、支援に必要な物資や供給の日時の告知、ボランティアとしての参加方法、寄付のしかたなど、必要な情報はすべて揃っている。
- 2) 2017年から2018年に強制退去が実施された場所として、いくつか挙げておく。
Municipio I: Piazza Indipendenza (Rione Castro Pretorio), Municipio IV: Via Scorticabove (Quartiere Tiburtino), Ex-Penicillina (Quartiere San Basilio), Zona Tor Cervara, Munisipio V: Via Fanfulla Da Lodi (Quartiere Pigneto)
- 3) イタリアからフランスへはヴェンティミッリャが、オーストリアへはブレンナー峠が「通路」になっていたが、国境管理が再導入されると、多くの「難民」が押し戻された。
- 4) Schmidt Donatella & Palutan Giovanna, All'ombra del baobab. Rifugiati, emergenza e considerazioni sul dono alla periferia di Roma, *Antropologia post-globale*, speciale n. 1, 2016, pp.211-246.

2016年7月26日、9月5日、9月17日、2017年10月31日、11月2日、2018年2月21日、1月21日のフィールド・ノートも付けられている。参与観察の手法とともにボランティアをしながら、調査を進めている。ふたりの関心は、非常事態下でどのような贈与システムが作動するかにあり、筆者とは異なるのだが、日常的な現場の様子を包括的に記述しているため、大変参考になった。

- 5) 駐車場にする予定であったことは、コンクリートと白線から Google Earth でも確認される。この場所自体に名前はなかった。ティブルティーナ駅裏のスパドリニ広場という名の道路に囲まれる、半楕円状の空間なのである。そこを *Baobab Experience* の拠点として、ソマリアからやってきたものの19歳で自ら命を絶った Maslax Maxamed の名前をとって名づけたのである。彼はクーバ通りにやってきたときは混乱して絶望していたが、姉が暮すブリュッセルにいく目処がたって、2016年10月にスーダンの友人とともにローマを立った。しかし、姉には会えたものの「ダブリン規約」によってイタリアへ送還されてしまった。これが原因で死を選んだとされる (*Baobab Experience* ホームページによる)。
場所を自分たちが名づけるという行為によって、スパドリニ広場は意味を持つようになったと言えるのではないだろうか。
- 6) Schmidt Donatella & Palutan Giovanna, *ibid.*, pp. 220-243.
- 7) ベイ、ハキム「TAZ／一時的自律ゾーン」『T.A.Z. ―一時的自律ゾーン』箕輪裕訳、インパクト出版、1997年、pp.187-273。
ハキム・ベイによれば、T.A.Z (Temporary Autonomous Zone) とは「自治・平等・

自由な小領域」を指す。例えば、18世紀の「海賊のユートピア」、17～18世紀のジャマイカやハイチなどに見られた「マルーン共同体」、遊動する狩猟民のバンドなどを挙げている。

[参考文献]

Bhimji, Fazila

- 2016 Visibilities and the Politics of Space: Refugee Activism, *Journal of Immigrant & Refugee Studies*, vol.14 /4, pp.432-450.

Signorini, Virginia

- 2013 Abitanti di uno spazio incerto. Pratiche e paradossi in una etnografia tra rifugiati, operatori e diritti sociali, Tesi di Dottorato, Università Degli Studi Di Trieste (IUIES).

Schmidt Donatella & Palutan Giovanna

- 2018 All'ombra del baobab. Rifugiati, emergenza e considerazioni sul dono alla periferia di Roma, *Antropologia post-globale*, speciale n. 1, pp.211-246.

Marchetti, Chiara & Manocchi, Michele (ed)

- 2016 Rifugiati in transito attraverso l'Europa, *Mondi Migranti*, 1, pp.21-119.

Queriolio Palmas, Luca

- 2017 Nuit debout. Transiti, connessioni e contestazioni negli accampamenti urbani dei rifugiati a Parigi, *Mondi Migranti* 2.

スコット、ジェームズ

- 2013 「国家をかわし、国家を阻む——逃避の文化と農業——」『ゾミア——脱国家の世界史——』佐藤仁監訳、みすず書房、pp.181-220。

内藤直樹・山北輝裕編

- 2014 『社会的包摂／排除の人類学——開発・難民・福祉——』昭和堂。

ハキム、ベイ

- 1997 「TAZ／一時的自律ゾーン」『T.A.Z. ——一時的自律ゾーン』箕輪裕訳、インパクト出版、pp.187-273。

[参照サイト]

<https://www.asylumineurope.org/sites/>

<https://baobabexperience.org>

<https://www.internazionale.it/notizie/2015/05/12/>

<https://www.medicisenzafrontiere.it/wp-content/uploads/2019/04/Fuoricampo2018.pdf>

<https://openmigration.org/analisi/tra-gli-invisibili-di-piazzale-spadolini/>

<https://roma.repubblica.it/cronaca/>

(文学研究科准教授)

SUMMARY

“Temporary Autonomous Zone” That Occurs in Public Spaces in Cities
 — The Activities of *Baobab Experience* in Rome —

Yasuko IMOTO

Keywords: “refugee”, eviction, temporary autonomic zone

This paper is about the very existence of ‘refugees locked out’ from public spaces in cities by ‘forced evictions’ rather than general issues regarding refugee policies or institutions in Italy considering the activities of the *Baobab Experience*, which is a grassroots group composed of entirely volunteers in Rome. It was shown that, through the *Baobab Experience*, which moves with people who have been ‘locked out’, ‘refugees’ who have been forcefully evicted/perpetually remain border-crossers should create ‘temporary autonomous zones’ within the city of Rome and maintain solidarity without being divided from their surroundings due to diverse relationships. Furthermore, it was also indicated that this ‘autonomy’ and ‘solidarity’ were possible because the activities of the *Baobab Experience* do not ‘set’ the ‘refugees’ so that they can conveniently live in their temporary evacuated areas/migration destinations or provide support in a way that forces them to adjust to reality.